

中年期のアンブロアズ・パレ

大村 敏 郎

近代外科の父、日本の西洋医学の源流ともいふべき『パレ全集』を残し、わが国の医学に大きな影響を与えたフランスの外科医アンブロアズ・パレ (Ambroise Paré, 1510?-1590) が世を去って今年で四〇〇年目を迎える。そこでこの人物が活躍した壮年の時期に焦点を合わせてみたい。

フランス国王フランソア二世 (François II, 1544-1560) が十五歳で即位したのは一五五九年のことである。新しい国王が即位するのは前の国王であった父アンリ二世 (Henri II, 1519-1559) が死亡したからである。槍試合のトーナメントに出場して対戦相手に左眼を突きさされたのが原因であった。フランスとスペインの和平回復と二つの婚礼のお祝いの行事として行われたものであったから、華やかな祝宴が一転してフランス王室に暗雲がたちこめたのである。婚礼の一つはスペイン王フィリップ二世 (Philippe II,

1527-1598) と王女エリザベート (Elisabeth, 1545-1568) のもので、両国の間にくりひろげられていた戦争を終結させ、友好関係を作る重要な意味をもっていた。

フィリップ自身はフランドルのブリュッセルにいて、祝いの式典には代理をつかわせていた。花嫁の父に事故が起ったことを早馬で知らされると、直ちに自分の侍医アンドレアス・ヴェサリウス (Andreas Vesalius, 1514-1564) をパリへ派遣したのである。

ここで、近代解剖学の父ヴェサリウスと近代外科の父アンブロアズ・パレが瀕死の床にしている国王アンリ二世を対診するのである。ヴェサリウスの解剖の知識もここでは役に立たず、王は死を迎えた。

ヴェサリウスは医学部出身の医師、他方パレは床屋外科医から外科医組合の会員に選ばれた外科医であるが、この二人は同じ頃パリの医学部の教授の弟子であった。ヴェサリウスに関する時は、ヤコブス・シルヴィウス (Jacobus Sylvius, 1478-1555) とラテン語で、パレに関していう時にはジャック・デュボア (Jacques Dubois) とフランス語で呼びわけられているが、同一人物である。

ところでスペイン王フィリップ二世は思いがけないこと
でわが国にその紋章が伝えられているのである。杉田玄白
(一七三三〜一八一七)らが書いた『解体新書』の有名な
扉絵の上段中央にイルカのマークとして登場しているの
である。

この絵は原著ヨハン・アダム・クルムス (Johan Adam
Kulmus, 1689-1745) の解剖書の扉絵ではなく、スペイン
の一六世紀のワルエルダの解剖書からもってきたものであ
ることが知られている。あの扉絵の左右にいる男女がアダ
ムとイヴだということ幕府の役人に咎められたら、キリ
シタン禁制の江戸時代には出版は許されなかつたに違いな
い。

自分の解剖書から無断で引用し、しかも改悪したとヴェ
サリウスはワルエルダを非難したという曰く付きの本であ
り、そのワルエルダが今度は扉絵を『解体新書』に使われ
てしまったのである。ワルエルダは時の国王フィリップ二
世に捧げて彼の紋章を刻んだのであったが、わが国ではそ
の意味も知らずに少し変形させて使っているのである。

若いフランス国王フランソア二世の妻はスコットランド

から来たメアリー・スチュアート (Mary Stuart, 1542-
1587) である。父はスコットランド国王ジャック五世、母
はフランスのロレーヌ公の娘マリーであったから、ロレー
ヌ公の勢力が強まるのを恐れ、王室内に暗躍が始まろうと
した時に、フランソア二世は持病の中耳炎から頭蓋内に膿
瘍が起き、若い王に手術をするかどうかアンブロアズ・パ
レがためらっているうちに、一七ヵ月王位に坐つただけ
で、王は父の後を追ってしまった。一五六〇年の暮のことで
あった。すでにトレパナージュの機具も考案し、実際に手
術の経験もあったパレであったが、相手が国王となると周
囲がそれを許さなかつたのであろう。フランス国王が手術
を受けるのは一六八六年のルイ十四世 (Louis XIV, 1638-
1715) の痔瘻まで待たねばならない。

フランソア二世の弟シャルル九世 (Charles IX, 1550-
1574) は十歳で即位した。十五歳までは母カトリヌ・
ド・メディシス (Catherine de Médicis, 1519-1589) が
摂政であった。パレが首席外科医に任命されるのはこの国
王からである。

一五六四年、パレは『外科一〇巻』を出版した。この中

に切断の場合、血管を結紮して止血することが記載されており、頬の傷を今日の形成外科的な考え方で治す図が登場してゐる。扉ページには王母カトリヌとシャルル九世のイニシアルCが重ね文字になって出ている。

その後もパレは晩年七十五歳頃まで執筆改訂に意欲をもつて取り組んでいた。一五九〇年十二月二十日からちょうど四〇〇年目の命日にアンブローズ・パレ四〇〇年祭記念式典が東京で行われることが決定している。

(慶應義塾大学医史学研究室)

『竈篤児（ワートル）薬性論』の異版

宗田 一

林洞海訳補『竈篤児薬性論』には、①存誠齋、②旭窓、③英蘭堂の三種の蔵版主名をもつ異版がある。それら三種の封面には、すべて「安政三丙辰孟春新雕」の記載がみられるので、一般の図書目録にこれらすべてを安政三年（一八五六）版としているのが多い。

しかし奥付刊記に「安政三丙辰年正月刻成」と記すのは①のみで、また柱に「存誠齋蔵」とあるのが②③では削除されているから、明らかに②③は後版である。したがって①のみが初版本系とみてよい。

この①系の発行書賈は、和泉屋金右衛門（江戸横山町三丁目）、山城屋佐兵衛（同日本橋通り二丁目）、須原屋伊八（同浅草茅町二丁目）の三軒で、②系には嶋村屋利助（大門通難波町）が加わり四軒になっている。ただし、管見に入った②系の住所は東京となっている。